

# 1889年パリ万国博覧会における先住民と植民地帝国アイデンティティの醸成

「セネガル村」とそのイメージ形成を中心に

島村駿

## 序論

フランス革命 100 周年の節目に立つ 1889 年、革命の継承者を自任する第三共和政はパリで 4 度目となる万国博覧会を開催した。フランスの工業的進歩を象徴するエッフェル塔が最大の呼び物となり、その来場者はこれまでの万博を凌駕する 3,200 万人以上を記録した<sup>1</sup>。そして、フランスの国力を内外に誇示したこの万博は植民地展示の拡大によっても特徴づけられる。植民地部門に対してはアンヴァリッド広場 (l'Esplanade des Invalides) に独立したスペースが設けられたが、そこで多くの訪問者を惹きつけたのが敷地内にセネガルやニューカレドニアなどの植民地村落を再現して実際に先住民を住ませるという、センセーショナルな生きた展示であった。本稿では、フランス革命 100 周年という共和派にとって特別な意味を持つ年の博覧会に植民地村落の再現を導入することを通して第三共和政がどのような植民地イメージを醸成し、どのような帝国イメージを示そうとしたのかを検討したい。

1889 年パリ万博における植民地展示に言及した研究は豊富にある。重要なものとして、フランスのオリエが万博 100 周年を迎える 1989 年にこの万博について体系的に論じた著作を発表した。植民地展示については当時の植民地政策の状況との関係の中で論じ、各パビリオンがそれぞれのあり方で、フランスの植民地事業を正当化していたことを示した<sup>2</sup>。また、植民地展示に関する個別研究としてはパレルモが建築や展示空間のレイアウトなどの観点から分析を行った。そこでは本国フランスと植民地、さらには植民地同士の間には存在するヒエラルキーが展示空間にも表れていたことを指摘した<sup>3</sup>。これらの先行研究の根底には、サイードが 1978 年の著作において発表した「オリエンタリズム」論を受けて、万博が植民地支配を正当化するイデオロギーの再生産を担ったという共通認識がある<sup>4</sup>。つまり、植民地展示は植民地事業を正当化するための帝国主義的プロパガンダとして理解されているのであり、その展示空間における異文化表象のあり方を分析することで潜在的な人種差別意識を読み解くことが主な研究目的とされてきた<sup>5</sup>。

その最たる対象が村落の再現であり、これは「人間の展示」や「人間動物園」の一つとして論じられてきた。19 世紀の欧米諸国では、非西洋人や「奇形」とされる人々をサーカスや見本市にお

<sup>1</sup> 前回の 1878 年パリ万国博覧会の総来場者数が 16,156,626 人であったのに対して、89 年パリ万博では 32,250,297 人を記録したという。Brigitte Schroeder-Gudhus, Anne Rasmussen, *Les fastes du progrès: le guide des expositions universelles, 1851-1992*, Paris: Flammarion, 1992, pp. 96 et 112.

<sup>2</sup> Pascal Ory, *L'exposition universelle*, Bruxelles: Éditions Complexe, 1989. オリエの主要な万博研究としては、他に以下の文献も挙げられる。Ory, *Les expositions universelles de Paris: panorama raisonné, avec des aperçus nouveaux et des illustrations par les meilleurs auteurs*, Paris: Éditions Ramsay, 1982.

<sup>3</sup> Lynn E. Palermo, "Identity under construction: representing the colonies at the Paris exposition universelle of 1889", in Sue Peabody et Tyler Stovall (dir.), *The color of liberty: histories of race in France*, Durham: Duke University Press, 2003, pp. 285-301.

<sup>4</sup> 伊藤真実子「博覧会研究の動向について—博覧会研究の現在とその意義」『史学雑誌』第 117 編第 11 号、2008 年、103-104 頁。

<sup>5</sup> Van Troi Tran, "How 'natives' ate at colonial exhibitions in 1889, 1900 and 1931", *French cultural studies*, vol. 26, no. 2, 2015, pp. 163-164.

いて見せ物とし、「身体的・精神的差異を見る」ことを商品化するような娯楽が大衆文化として急拡大していた<sup>6</sup>。1889年パリ万博では、そうした民間の「人間の展示」「人間動物園」が村落の再現という形をとって国家規模の博覧会に初めて導入された。そしてこの展示がその後の国際博覧会や植民地博覧会において一つのモデルとされたことで、89年パリ万博は民間のものから国際博覧会までも含む広義の「人間の展示」「人間動物園」の歴史の中に組み込まれ、その連続性の中で研究されている。これに関する重要な研究として、イギリスのグリーンハルジュが万博史を包括的に論じた著作がある。そこでは89年万博を起点とする博覧会の「人間展示会 (Human showcases)」の歴史の中で、人間が「モノ」へと変貌したことが論じられている<sup>8</sup>。

このような「人間の展示」「人間動物園」は当時一般的であった人種主義や社会進化論を躊躇なく表現していたことから、「博覧会の歴史のなかでも最も悪名高いひとつの伝統」というイメージで理解されている<sup>9</sup>。その結果、非人道的な展示形式がとりわけ着目されやすくなり、先住民を展示物、西洋人を観客とするような一方的・固定的関係を前提として異文化表象の分析が行われてきた。しかし、このような研究上の前提はむしろ植民地先住民自体に焦点を当てづらくし、研究史の中で先住民を「モノ」化・透明化する危険性を孕んでいる。先住民はただ「モノ」として運ばれ、展示されたのではない。先住民はパリで生き、日々を暮したのであり、フランス国民はそんな先住民と実際に接触し、交流した。万博という特異的な現象を研究する意義はそこにもあるだろう。

その意味で視点を変えた研究としてトランに注目できる。彼はこれまで見過ごされてきた万博会場での一過性のイベントや来場者・先住民それぞれの消費活動といった「静的な」博物館的展示とは異なる「動的な」現象に着目することで、本国と植民地の文化の相互浸透があったことを示した<sup>10</sup>。また、先住民のパリでの日常生活に言及した研究があまりないことを指摘したうえで、その食生活を分析した。そこでは、当局による先住民の食事への強い介入が「文明化の使命」の一部として植民地の保護者というフランスのイメージを形成したことや、食事の共有が植民地統合のパフォーマンスとなったことを論じた<sup>11</sup>。本稿ではこうしたトランの研究に依拠しつつ、この植民地部門を総括したルイ・アンリク (Louis Henrique) が植民地展示の理念として述べた次の言葉をより深く分析することで<sup>12</sup>、この万博において提示された先住民像へとさらに踏み込みたい。

<sup>6</sup> Nicolas Bancel, Pascal Blanchard, Gilles Boëtsch, Éric Deroo et Sandrine Lemaire, « Zoos humains: entre mythe et réalité » dans Nicolas Bancel, Pascal Blanchard, Gilles Boëtsch, Éric Deroo et Sandrine Lemaire (dir.), *Zoos humains: au temps des expositions humaines*, Paris: La Découverte, 2004, pp. 7-11.

<sup>7</sup> Paul Greenhalgh, *Ephemeral vistas: the expositions universelles, great exhibitions and world's fair, 1851-1939*, Manchester: Manchester University Press, 1988, pp. 85-86. グリーンハルジュは、1889年パリ万博において「国際的な観客の前で、初めて人々は動物学的な展示品のレヴェルにまで成り下がった」と述べている。Ibid., p. 87.

<sup>8</sup> Greenhalgh, *op. cit.* この研究を受け、国内では吉見が博覧会における「人間の展示」の持つ人種差別的な性格を強調している。吉見俊哉『博覧会の政治学—まなざしの近代』中央公論社、1992年。また、「人間動物園」という表現については、近年バンセルやブランシャールらによってその現象についての研究がまとめられるなど、一層注目を集めている。Bancel et al., (dir.), *Zoos humains, op. cit.*; Bancel, Blanchard, Boëtsch, Deroo et Lemaire (dir.), *Zoos humains et expositions coloniales: 150 ans d'inventions de l'autre*, Paris: La Découverte, 2011.

<sup>9</sup> 吉見、前掲書、184頁。

<sup>10</sup> Van Troi Tran, « L'éphémère dans l'éphémère: la domestication des colonies à l'exposition universelle de 1889 », *Ethnologies*, vol. 29, nos. 1-2, 2007, pp. 143-169.

<sup>11</sup> Tran, «How 'natives' ate at colonial exhibitions in 1889, 1900 and 1931», pp. 163-175.

<sup>12</sup> Louis Henrique-Duluc (1846-1906)。1880年から81年までオーブ県の書記長を務めたのち、植民地問題を専門とするジャーナリストに転身した。1883年には高等評議会におけるサンビエール・ミクロンの代表に選出されるとともに、フランス植民地化協会を設立し、会長を務めた。1889年万博の植民地部門を総括した後も、植民地問題の中で政治キャリアを積み、1898年にはフランス領インドの代議士に選出された。その間は急進左派に

植民地展示を組織した者たちは、その構想の中において二つの関心事に従って動いていた。彼らはフランスに植民地を見せ、そして植民地先住民にフランスを見せることを望んでいたのである<sup>13</sup>。

アンリクは植民地展示を振り返って、「フランスに植民地を見せる」および「先住民にフランスを見せる」という二つの目標を示している。先住民には展示空間においてフランスに見られる役割だけではなく、フランスを「見る」役割も期待されていた。つまり、この万博における先住民の存在は展示空間における表象という枠組みだけでは捉えることができないといえる。だからこそ公式的な記述において「見る側」として先住民がどのように描かれているのかを見ることは、この万博において国民に提示された先住民像を捉えるうえでも重要になるだろう。本稿では、この二つのベクトルから1889年パリ万博における先住民の役割を再整理することを通して、第三共和政フランスが形成しようとした先住民像や帝国イメージを再検討することを試みる。

まず、第1章で1889年パリ万国博覧会の政治的背景を確認する。そのうえで、比較的大きな規模で設置され、研究史上「黒人村」として代表的に語られることも多い「セネガル村」(*le village sénégalais*)を中心に、セネガルの先住民を事例として取り上げる。第2章では「フランスに植民地を見せる」という観点から、特に国内研究であまり言及されてこなかった村や先住民の構成を可能な限り再現し、万博の特徴である「交流」の描き方に注目する。第3章では「先住民にフランスを見せる」という観点を論じるために、「フランスを見る側」として先住民がどのように描かれているのかに着目する。それを踏まえて最終的にはそうした先住民の描き方に、本国民と先住民の双方へ向けた、植民地帝国の一員としてのアイデンティティの促進を読み取ることを目指す。

本稿で依拠した主な史料としては、博覧会の組織委員長 (*commissaire général*) でもあった商業・工業・植民地大臣の後援を受けてエミール・モノ (*Émile Monod*) が1890年に出版した万博レポート『1889年万国博覧会 (*L'Exposition universelle de 1889*)』が挙げられる<sup>14</sup>。「博覧会の百科全書を出版することを試みた」本史料は博覧会会場における実際的情報が豊富なだけでなく<sup>15</sup>、植民地部門を総括したアンリクがそれに関する章の作成に協力し一部執筆も行なっていることから<sup>16</sup>、組織側の公的認識の中で先住民の位置付けを検討することも可能となる。加えて、アルフレッド・ピカール (*Alfred Picard*) が執筆し<sup>17</sup>、1891年に商業・工業・植民地省より刊行された『1889年パリ万国国

属した。Jean Jolly (dir.), *Dictionnaire des parlementaires français: notices biographiques sur les ministres, députés et sénateurs français de 1889 à 1940*, 8 vols., Paris: Presses Universitaires de France, 1960, tome VI, p. 1954.

<sup>13</sup> Émile Monod, *L'Exposition universelle de 1889*, 3 vols., Paris: E. Dentu, 1890, tome II, p. 139. トランもこの記述に言及している一方で、論の重点は、先住民の食事を展示空間における見せ物として、その表象の意味を分析することに置かれている。Tran, "How 'natives' ate at colonial exhibitions in 1889, 1900 and 1931", pp. 164-165.

<sup>14</sup> *Ibid.*, <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k3413424j.image> (consulté le 20 janvier 2024).

<sup>15</sup> *Ibid.*, tome III, p. IX.

<sup>16</sup> Monod, *op. cit.* において「植民地展示」(*Exposition colonial*, pp. 139-222) と題された章のうち、「序論」(*Introduction*, pp. 139-147) はアンリクが寄稿している。

<sup>17</sup> Alfred-Maurice Picard (1844-1913)。ストラスブールに生まれたピカールは、多くの共和主義者を輩出することになるアルザス・ロレーヌ地方において、自らも共和主義の思想を育んだ。土木学校を卒業後、技師としての経験を積み、鉄道分野を中心にフランスを代表する技師の一人となり、1889年万博では鉄道機材・機会・電気に関する部門の委員会議長を勤めた。そして『総括報告書』の執筆で名声を獲得すると、1900年パリ万博では組織委員長に就任した。死後は国葬が行われた。寺本敬子「アルフレッド＝モーリス・ピカール—1889年パリ万国博と「革命」」高橋暁生編『〈フランス革命〉を生きる』刀水書房、2019年、215-239頁。

際博覧会総括報告書 (*Exposition universelle internationale de 1889 à Paris: rapport général*)<sup>18</sup> (以下、『総括報告書』) や、会期中に発行された『1889 年万国博覧会公報 (*Bulletin officiel de l'exposition universelle de 1889*)<sup>19</sup> (以下、『公報』) についても、万博の公式的な記憶を形成するための出版物として利用した。また、『ル・プチ・ジュール (*Le Petit Journal*)<sup>20</sup>、および『ル・プチ・パリジャン (*Le Petit Parisien*)<sup>21</sup> の二紙も一部参照した。これらはページ数の少なさや価格の安さから民衆に広く愛読されたものであり<sup>22</sup>、そこでの記述を通して同時代に共有されていた万博やそこにおける先住民に対する認識に接近することが可能となるだろう。

## 1. 1889 年パリ万国博覧会の背景

### (1). フランス革命理念の継承者としての第三共和政

普仏戦争下の 1870 年にナポレオン 3 世が捕虜となり第二帝政が崩壊すると、それに代わる政体として第三共和政が成立した。これ以降フランスは共和政をとることになったが、新しい政体をめぐっては王党派との激しい対立があり、共和派の勝利は決して当然視されたものではなかった。そこで第三共和政政府は自らの権威の正統性をフランス革命に見出し、その継承者を自任することで国民の信任を得ることを目指した。『ラ・マルセイユーズ』の国歌制定 (1879) や 7 月 14 日の法定祝日化 (1880) などの政策を通して、共和政の下でフランス革命の記憶を共有する「フランス国民」の創出を図ったのである。

第三共和政が積極的に推進した植民地政策も、そうしたフランス革命理念に基づく国民統合政策としての一面を持っていた。フランス植民地政策の大義名分となったイデオロギーとして、ジュール・フェリー (Jules Ferry) の演説で知られる「文明化の使命」論がある。この「文明化の使命」について杉本は『フランス革命理念』を共通の文化規範とするこのような集合心性創出のための、(中略) 国民統合イデオロギー装置だったと考えても間違いではないだろう」と述べる<sup>23</sup>。また、平野は帝国主義時代のフランスにおける「文明化」の意味の一つに革命理念の伝播をあげ、それがフランス特有の植民地拡大正当化の方法だと指摘する<sup>24</sup>。つまり、「文明化の使命」は第三共和政の掲げたフランス革命理念と密接に結びつくものであった。

加えて、フランスの植民地政策において重要な観点であるとみなされてきたのが「同化 (Assimilation)」政策である<sup>25</sup>。この考え方はもともと、革命期に「一にして不可分の共和国」の理

<sup>18</sup> Alfred Picard, *Exposition universelle internationale de 1889 à Paris: rapport général*, 10 vols., Paris: Imprimerie nationale, 1891, tome II, <https://cnum.cnam.fr/pgi/redir.php?ident=8XAE349.2> (consulté le 20 janvier 2024).

<sup>19</sup> *Bulletin officiel de l'exposition universelle de 1889* (以下、B.O.E.U.と略記する), Paris, 1889, <https://cnum.cnam.fr/pgi/redir.php?ident=FOLXAE15> (consulté le 20 janvier 2024).

<sup>20</sup> *Le Petit Journal*, <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/cb32895690j/date> (consulté le 20 janvier 2024).

<sup>21</sup> *Le Petit Parisien*, <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/cb34419111x/date> (consulté le 20 janvier 2024). また、*Le Petit Parisien: supplément littéraire illustré*, <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/cb344191170/date> (consulté le 20 janvier 2024).

<sup>22</sup> 杉本淑彦『フランスにおける帝国意識の形成』北川勝彦、平田雅博編『帝国意識の解剖学』世界思想社、1999 年、96 頁。

<sup>23</sup> 同論文、90 頁。

<sup>24</sup> 平野千果子『フランス植民地主義の歴史—奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院、2002 年、169-175 頁。

<sup>25</sup> この「同化」について松沼は、その定義を明確にしないまま安易にフランス植民地政策を表す言葉として使用してきた国内研究の動向を批判して、その言葉の含意を整理している。松沼美穂『植民地の〈フランス人〉

念に立脚して生まれたものであった。奴隷制廃止をめぐる問題の中で第二共和政によって引き継がれていったものの、やがて宗教的問題などに直面したことでその現実性が疑問視されるようになり、実現されないまま次第に影を潜めた。そして代わりに「協同 (Association)」政策が<sup>26</sup>、特に世紀転換期ごろから植民地統治において唱えられるようになっていった<sup>27</sup>。しかし 19 世紀末のこの時代、フランス革命の継承者を自任し、その記憶を利用する第三共和政の下で同化という考え方は完全に放棄されたわけではなかった。例えば 1889 年から開催された植民地会議では、フランスの支配地域において同化に向け努力する方針が採択されていたと平野は指摘している<sup>28</sup>。実際の現場において同化政策が放棄される一方で、その理念だけは存続していたのである。

以上のように、第三共和政はフランス革命理念を継承し、利用しながら国民国家の形成と植民地帝国の拡大を推進していた。そのような状況の下で開かれたのが、共和派の主導した 1889 年パリ万国博覧会であった。

## (2). 1889 年パリ万国博覧会とその植民地展示

1851 年にはじめてロンドンで開催された万国博覧会はそれ以降、政府による国民教育の手段として用いられてきた。1867 年パリ万博の頃から 19 世紀末にかけて、その主な対象が富裕層から労働者層に移っていくと、政権の安定化のために国民に情報を与え、世論に対しての影響力を確保することが一層追求されるようになった<sup>29</sup>。だからこそ、フランス革命の記憶に基づいた国民形成を図る共和派にとって 1889 年はとりわけ重要な意味を持っていただろう。しかしこの万博の開催にあたっては、その開催年がフランス革命 100 周年と重なっていることから、王党派や君主政諸国の強い反発を受けた<sup>30</sup>。そのため、組織委員らは彼らを刺激しない慎重な姿勢が求められることとなった。『総括報告書』やその執筆者ピカルルについての分析を行った寺本は、『総括報告書』では革命や共和政の政治的な意義が強調されるのではなく、革命を起点とした民衆の解放が強調されており、この 100 年間でフランスがいかに進歩したかという「世紀の進歩」を確認する商業と産業の祭典としてこの万博が位置付けられていたことを指摘した<sup>31</sup>。そうしたフランスの進歩を最も顕著に表していたのが、鉄を大量に利用したエッフェル塔の建設だと言えよう。

そしてその進歩と対比されたのが、主会場であるシャン・ド・マルスからは離れた場所にあるアンヴァリッド広場に設置された植民地部門であった。この時代、アフリカ分割に関するベルリン会議 (1884-85) の開催を端緒として、ヨーロッパ諸国による植民地競争が激化しつつあり、植民地政策に対する国民の支持を得ることは急務となっていた。その意味で 89 年万博は国民に向けて植民地政策を宣伝する格好の場であったと言える。しかし現実には目を向けると、前回の 1878 年のパ

一第三共和政期の国籍・市民権・参政権』法政大学出版局、2012 年、30-61 頁。本稿でこの言葉を用いる際には植民地先住民との文化・言語的「同化」を念頭に置いている。

<sup>26</sup> 「協同」にも明確な定義はなく、「先住民を彼ら自身の方向性に沿って発展させる」という漠然としたニュアンスのみ共有されている。同書、47 頁。

<sup>27</sup> 平野、前掲書、72-76、125-126、197-200 頁；砂野幸稔「同化と直接統治〈フランス領西アフリカ〉」宮本正興、松田素二編『新書アフリカ史』講談社、1997 年、323-331 頁。

<sup>28</sup> 平野、前掲書、200 頁。

<sup>29</sup> Palermo, *op. cit.*, p. 290.

<sup>30</sup> 実際に、イギリスやドイツをはじめとして、多くの君主政諸国が 1889 年パリ万博に対する公式的な参加を拒否している。寺本、前掲論文、225 頁。

<sup>31</sup> 同論文、215-239 頁。

リ万博は教育的な展示に対する国民の関心の下火化を受けて赤字に終わっていた。そのような状況において、89年パリ万博の組織委員は来場者数を確保し収益を増やすためにも、植民地展示において娯楽性を増やすことが求められた<sup>32</sup>。

その際に注目されたのが、「人間動物園」が大衆向けの娯楽として拡大するのと時を同じくしてパリ西部ブローニュの森に位置する順化園 (le Jardin d'Acclimatation) で行われていた他民族の展示であった。動物学・植物学研究の中心地であるこの場所ではもとより動植物が展示されていたが、1877年以降、来場者の増加を図って世界各地の非西洋民族を連れてきて展示に含めるようになっていた<sup>33</sup>。そしてこれが植民地政策への時事的な関心と重なることで、フランス政府も一般大衆に植民地帝国を宣伝するうえでのこうした展覧会の有用性を認識するようになった<sup>34</sup>。

その結果組織されたのが、89年パリ万博における大規模な植民地展示とそこにおける村落の再現であった。19世紀を通して発達してきた非西洋人の見せ物的な興行と、国家の威信をかけたプロパガンダとしての万国博覧会という特殊な空間とが混合された結果として、「植民地の村を再現してそこに先住民を住まわせる」という新しい形態が生まれたのである。この植民地展示は「それ自体、[1889年パリ万博という]大規模な博覧会における一つの正真正銘の博覧会であり、のちにマルセイユ (1906, 1922) やパリ (1931) において、一体を成すフランスの海外領土という夢や野望、幻想を見事に結晶化させることになる『植民地博覧会』の最初のもの」となり<sup>35</sup>、多くの人の異国趣味を掻き立てた。そして、万博の組織委員はこの展示を通して植民地に対する知識を普及させると同時に「文明化の使命」を喧伝し、植民地事業に対する国民の支持を得ることを目指した。これがこの植民地展示の第一の側面である。

それに加えて、本稿ではこの植民地展示の第二の側面を指摘したい。この植民地部門を総括したルイ・アンリクは先住民について言及した際に次のように述べている。

我々との接触で彼らは何物かを確かに得たのである。彼らの精神は新しい考え方に開かれ、我々の文明からはまだ遠く離れたこれらの人々の下で、フランスが道徳的な理念を育てる役割はこれまでよりも果たしやすくなるだろう<sup>36</sup>。

これは典型的な「文明化の使命」の表出であるが、ここでは先住民が89年パリ万博においてフランスの文明に接触することで、フランスによる支配を受け入れるようになることが期待されている。つまり、先住民は展示物としてただフランス国民に見られるためだけにパリへと連れてこられたわけではなかった。彼ら自身がこの機会にフランスを見ることで、その考え方に変化が起き、植民地において積極的に「文明化」が促進されることが目指されていたのである。本稿では89年パリ万博の植民地展示の目標に示された、この二方向性に着目する。そして、この二つの側面に対応するのが、冒頭で示した「フランスに植民地を見せる」および「先住民にフランスを見せる」という理念である。以下、この二つのベクトルから万博における先住民像を検討していく。

<sup>32</sup> Palermo, *op. cit.*, p. 290.

<sup>33</sup> Greenhalgh, *op. cit.*, pp. 86-87.

<sup>34</sup> William H. Schneider, « Les expositions ethnographiques du Jardin zoologique d'acclimatation », dans Bancel et al., (dir.), *op. cit.*, p. 77.

<sup>35</sup> Ory, *op. cit.*, p. 93.

<sup>36</sup> Monod, *op. cit.*, p. 144.

## 2. 「フランスに植民地を見せる」

### (1). 「セネガル村」とセネガルの先住民

1889年、パリのアンヴァリッド広場には人々の異国趣味を掻き立てる建築物がひしめき合っていた。当時のフランス首相ピエール・ティラール (Pierre Tirard) はこの植民地展示について、5月6日の万博の開幕式で次のように述べている。

これらの様々な地域で最も特徴的な建築と、それらに生命を吹き込む先住の人々を再現した特別なパビリオンがアンヴァリッド広場を形成し、それは訪れるのには最も好奇心を掻き立てられ、最も興味深い場所の一つである<sup>37</sup>。

つまり、様々な様式の建築とそこに住まう先住民が一体となって形成する非日常的な異世界空間そのものが、この植民地展示の魅力とされていた。それに沿って具体的な構成を見ていこう。

植民地部門の中央には植民地中央宮 (le Palais central des colonies) が位置しており、それは各植民地におけるフランスの建築様式を混合した巨大建造物であった<sup>38</sup>。その中央宮の北側、およびアンナン (現在のベトナム中部)・トンキン (現在のベトナム北部) のパビリオンの東側裏手に位置するのがセネガル村であった<sup>39</sup>。まずはその構造を明らかにしておこう。東西に長く伸びるセネガル村の先端部分にはタタ (tata) と呼ばれる、折れ線状になった高さ平均3メートルの城壁が再現された<sup>40</sup>。そしてその横に位置していたのが、サルデの塔 (la Tour de Saldé) と呼ばれる建築物であった。これはフランスが1859年にセネガル川沿岸のサルデに建築した軍事要塞を半分の大きさと再現したものである。この塔の中にはセネガルの産業製品の見本や農産物が置かれ<sup>41</sup>、植民地セネガルを経済的に紹介する展示空間として利用された。サルデの塔の奥には先住民の村が広がっており、そこでは小屋や職人の工房、モスクなどがみられた。軍事要塞の奥にセネガルの村があるという構造を通して訪問者は、フランスによるセネガル支配の実感を自然と植え付けられただろう。

中央宮やその他の大規模なパビリオン建築はフランス人建築家によって設計され、フランス人職人の手で大部分が建設されたのに対して、村落の小屋は材料を渡された先住民が自らで建てるのが求められた<sup>42</sup>。ここで描き出された植民地の「未発達」さは、フランスの相対的な先進性を示し、その工業化の進展を賛美するためのものであった<sup>43</sup>。パレルモは、セネガル村の職人集団の長を務めたサンバ・ラオベが、セネガルには鉄道や大きな建物があるにも拘らず藁や泥の小屋に展示されることは「屈辱的」であると、あるジャーナリストに話していたことを紹介している<sup>44</sup>。

<sup>37</sup> *Le Petit Journal*, 8 mai 1889, p. 1; *Le Petit Parisien*, 8 mai 1889, p. 1.

<sup>38</sup> Palermo, *op. cit.*, p. 287.

<sup>39</sup> なお、ここでいう「セネガル」という言葉の漠然性には注意しておく必要がある。「セネガル」が一般的に指すのはセネガル川の流域を中心とした地域であるものの、当時はフランス領ギニア (La Guinée française) の成立前であり、例えば現在のギニア共和国にあたるフータ・ジャロン (Fouta-Djallon) に見られる小屋も村では再現されている。Monod, *op. cit.*, p. 173. 以下、「セネガル」という表現はこの広義の意味で用いるものとする。

<sup>40</sup> Picard, *op. cit.*, p. 172.

<sup>41</sup> Monod, *op. cit.*, p. 172.

<sup>42</sup> Palermo, *op. cit.*, p. 289.

<sup>43</sup> Zeynep Çelik, Leila Kinney, “Ethnography and exhibitionism at the expositions universelles”, *Assemblage*, no. 13, 1990, p. 38.

<sup>44</sup> Palermo, *op. cit.*, p. 291.

次に、セネガルから万博を訪れた先住民に目を向けよう。この万博の『総括報告書』には、博覧会に来た民間の先住民 305 人のうち、セネガル人は 61 人だったと記載されている<sup>45</sup>。セネガル村の先住民としては工房で手工業を行う職人に加えて、羊飼いやグリオ (griot) と呼ばれる音楽家などもいた<sup>46</sup>。その他には丸木舟の漕ぎ手も多くパリに来ており、彼らはセヌ川で活動していた<sup>47</sup>。

彼らはそれぞれどのようなバックグラウンドを持っていたのだろうか、一部の先住民を取り出して検討したい。モノの万博レポートには、セネガル村の責任者エルネスト・ノワロ (Ernest Noirot) による報告書が一部引用されている<sup>48</sup>。そこでは、博覧会の最初の 1 ヶ月間村に住んでいたという 10 名を中心とする一部の先住民の名前や職業が記されている。次頁の表はそこで挙げられている先住民についてまとめたものである。この表に示した先住民だけ見ても、ウォロフ族やサラコレ族、フルベ族、トゥクロール族など、セネガル村が様々な民族の混合体で構成されていたことは明白である。実際、グリーンハルジュは様々な民族出身であった「セネガル人」同士で言葉が通じなかったことを指摘したうえで、大多数が自分たちの実際の習慣とは異なる振る舞いを強いられていたとした<sup>49</sup>。一方で、セネガル村を訪れた時のことについてモノは次のように述べている。

到着した村を一目見て驚いたのは、同じような住居が二つとないことだ。各部族固有の住居のうち最も変化に富んだ代表例が、いわば雑然とここに放り込まれている。これらは全て不統一な集合を形成していて、その中に風俗の共有を探しても無駄である<sup>50</sup>。

言葉が互いに通じない人々が一つの村の中に表象されたということ自体には、フランスによる植民地現地社会の恣意的かつ一方的な再編成を見て取ることができる。その一方で、セネガル村がそのような「風俗」を「共有」しない人々の寄せ集めであったことは、再現された数々の建築物を通して、観客の目にも明らかであったことは指摘しておきたい。

また、セネガルからパリを訪れた先住民は以上のような民間人だけではなかった。アンヴァリッド広場では植民地の部隊から全 106 名の先住民兵士が警備に当たっており、そのうちセネガル歩兵は 13 名、セネガル騎兵は 6 名であった<sup>51</sup>。彼らは、セネガル村にいる先住民とは与えられた役割が違ったものの、ただ警備のためだけに連れてこられたわけではなかった。『公報』において、中央宮でセネガル歩兵が警備をしていることは「それだけでエキゾチックな独創性を持った装飾

<sup>45</sup> Picard, *op. cit.*, pp. 175-176.

<sup>46</sup> 例として、*B.O.E.U.*, 17 mai 1889, pp. 2-3.

<sup>47</sup> 例えば *Ibid.*, 15 et 16 juillet 1889, p. 4 や、*Ibid.*, 21 juillet 1889, pp. 3-4 など、彼らについての記事が載っている。

<sup>48</sup> Ernest Noirot (1851-1913)。パリの劇場フォーリー・ベルジェールのセットデザイナーであった彼は、芸術家としてジャン・マリー・バイオルの使節団に参加し、1881 年に初めてアフリカに渡った。そこで強い印象を受けた彼は 1882 年に前年の訪問についてまとめた著書を出し、1886 年には三等司令官としてセネガルのダガナに赴任し植民地行政に関わるようになった。その後 1897 年にはフータ・ジャロン（現在のギニア共和国）の統治者に任命された。Martin Klein, *Slavery and colonial rule in French West Africa*, Cambridge: Cambridge University Press, 1998, p. 148; Emily Lynn Osborn, "Interpreting colonial power in French Guinea: the Boubou Penda, Ernest Noirot Affair of 1905", in Benjamin N. Lawrance et al. (dir.), *Intermediaries, interpreters, and clerks: African employees in the marking of colonial Africa*, Madison: The University of Wisconsin Press, 2006, pp. 57-60.

<sup>49</sup> Greenhalgh, *op. cit.*, pp. 88-89. さらに吉見はこの言及を踏まえて、そこに「彼らは単一の『未開人』としての振る舞いを強いられたという強調を付している。吉見、前掲書、186 頁。しかし、モノの記述を踏まえて考えるとセネガル人を「未開」という単一の枠組みに再編成したと強調するのは、一定の留保が必要であろう。

<sup>50</sup> Monod, *op. cit.*, p. 174.

<sup>51</sup> Picard, *op. cit.*, p. 176.



表：セネガル村の住民 15 名のプロフィール

名前	性	歳	民族	職業、役割	出身
Samba Laobé Samba Lawebée Thiam	男	40	oulouf	宝石加工職人 職人集団の長	Saint-Louis
Ely Eli Bahna	男	25	oulouf	宝石加工職人 Samba Laobé の職人	同
Amadou Tiam	男	13	oulouf	Samba Laobé の子	同
Balla N'Diaye	男	18	oulouf	織物職人	同
Bakar Diagne	男		race du Cayor	靴職人	
Bakiri Sissoko Bakari	男	25	sarakolé	鍛冶屋	Bakel
Boudou Sisoko	男	15	sarakolé	鍛冶屋 Bakiri Sissoko の弟	同
Malick Thiodaze Sar	男		race du Cayor	マラブー、羊飼ひ	
Samba-Kâ	男		peulh	羊飼ひ	
Diomna Sou	女		peulh	料理担当	
Roudhia-Dialo	女		toucoulour	同	
Fatou N'Jom	女		sérère	同	
Bithi-Lorho-Faye	女		sérère	同	
小さな子ども 1 人					
Ady-Sar	男		oulouf	丸木舟の漕ぎ手集団の長	Saint-Louis

典拠：Monod, *op. cit.*, p. 173.<sup>54</sup>

を形成している」と評されていることから分かる通り<sup>52</sup>、兵士たちはアンヴァリッド広場で植民地的な景観を構成する一要素として演出されていた。彼らも村の民間人と同じくフランス国民に見られる存在だったのであり、人々の異国趣味を掻き立てることが期待されていた。

さらに、この万博にはセネガル地域から先住民の諸君主や王族が多く見物に來たことも指摘しておきたい。その中でも特に重要な位置を占めたといえるのがディナ・サリフ (Dinah Salifou) 王である<sup>53</sup>。妻や息子、従者など合わせて 32 名で構成されるディナ・サリフ一行は『公報』や各紙で度々報じられており、彼らを見るために多くの人々が集まったという記述も少なくない。このように、セネガルからは民間人から王族まで、多岐にわたる先住民が博覧会を訪れていたのである。

<sup>52</sup> B.O.E.U., 24 septembre 1889, p. 3.

<sup>53</sup> Dinah Salifou (-1897)。のちのフランス領ギニアに含まれる地域におけるナル (nalous) 族およびバガ (bagas) 族の王。彼について記された 20 世紀初頭の報告書の中で、彼は「フランスの友人」と表現されており、彼が万博を訪れること自体が象徴的にフランスと植民地の友好を演出していたと言える。Alcide Delmont, *L'affaire Dinah Salifou (Guinée française), rapport de M. Alcide Delmont*, Paris: V. Giard & E. Brière, 1910, p. 1.

<sup>54</sup> なお、フランス国立図書館の電子図書館ガリカ (Gallica) で公開されているロラン・ボナパルト (Roland Bonaparte) のコレクションでもパリを訪れたセネガルの先住民 12 人の顔写真が公開されており、表における名前の表記揺れ、年齢および出身地についてはそれを参照して補足した。Village sénégalais, album de 24 phot.

## (2) 見るフランス人と見られる先住民の交流

では、セネガル村に住まう先住民は万博を訪れたフランス国民によってどのように「見られた」のだろうか。まず先住民は伝統的な手工業の様子から食事や洗濯、そして礼拝といった日常的な習慣に至るまで、様々な日々の営みを披露することを求められ、観客としてのフランス人はそれを柵の外から見物した。マックスウェルは植民地表象について論じた著作の中でこの植民地展示について、先住民の周りに高いフェンスが設置されていたことを指摘して、そこに観客と「展示物」の分離を強調している<sup>55</sup>。民間を含む広義の「人間動物園」についての議論では、西洋人がフェンスを隔てて「他者」である「野蛮人」と接触したことで、人種主義が科学的なものから大衆的なものへと移行していったとされているが<sup>56</sup>、この万博もそうした議論の例外ではないだろう。実際パレルモは、本万博でフランス人が彼らに「なんて猿だ！怪物だ！ああ、彼は醜い！」という言葉投げかけたことや、あるジャーナリストが「我々は動物ではなく、人間を見ていることを忘れている」とコメントしたことを引き合いに出し、そこに本国民の先住民に対する視線の残酷性を示唆している<sup>57</sup>。これこそがまさに、この展示が「人間の展示」と言われる所以となっている。

その一方で、この万博における植民地展示はそのような空間的分離に基づいた民間の「人間動物園」と必ずしも同一の性格のものとしてのみ考えて良いものではない。まず注目したいのが、アンリクが先住民の存在について次のように述べていることである。

しかし、ここで完全に注目するに値することは、博覧会に住んだ先住民の存在が見せ物の性格を持ったことは、一度も、決してなかったということである。

異国の者たちは全くもって展示されたのではなく出品者なのであり、他と同様、民衆の目の前で彼ら自身が作った、彼らの産業の商品を販売していた<sup>58</sup>。

アンリクはここで、再現村に住まう先住民たちは見せ物にされたのではなく、伝統的な手工業品を販売する出品者なのであると明確に述べている。実態は別としても、万博組織側の考え方の中では民間の見せ物ショーとは異なり「先住民は展示物ではない」という明確な意識が持たれていたことを示す記述である。博覧会の会期中、先住民に対するフランス国民の粗暴な態度や振る舞いへの批判がジャーナリズムの記事において流布していたことを想起すれば<sup>59</sup>、この主張はそうした世論に向けた「言い訳」として捉えることができる。もしくは先述した通りサンバ・ラオベが「屈辱的」とコメントしていたことを想起すれば、そうした先住民側の反発が意識されていたとも考えられよう。いずれにせよ、自由と平等を謳ったフランス革命の継承者を自任する第三共和政期においては、このような「言い訳」によって大衆文化的な民間の「人間動物園」と博覧会における植民地展示とを差別化することが必要だったと言えるのではないだろうか。

*anthropologiques présenté à l'exposition universelle de 1889 à Paris, des collections du prince R. Bonaparte*, <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b7702326g> (consulté le 16 octobre 2023).

<sup>55</sup> Anne Maxwell, *Colonial photography & exhibitions: representations of the 'native' and the making of european identities*, London, Leicester University Press, 1999, p. 19.

<sup>56</sup> Bansel et al., « Zoos humains: entre mythe et réalité » dans Bansel et al., (dir.), *Zoos humains, op. cit.*, p. 6.

<sup>57</sup> Palermo, *op. cit.*, p. 291.

<sup>58</sup> どちらの記述についても Monod, *op. cit.*, p. 140 からの引用。

<sup>59</sup> Tran, « How 'natives' ate at colonial exhibitions in 1889, 1900 and 1931 », pp. 171-172.

そのことを踏まえ、次に万博という空間の特異点として、本国民と先住民の「交流」の描き方に着目したい。トランが指摘しているように、フランスの万博における植民地展示は英米の同例と比較しても先住民の敷地内での移動の自由を広く認め、植民地の人々と本国の訪問者との交流を強く促すものであった<sup>60</sup>。事実、アンリクは博覧会を振り返って次のように述べている。

先住民はパリジャンや、さらにはパリジェンヌたちにもとても可愛がられ、囲まれた。彼らはその時の気分に応じて、黒人と黄色人種とに注意深い世話をした。特に女性たちは、彼女らに特有の機動力や活発な印象で、すぐに先住民に対してまさに母親のような思いやりをもって遇するようになった。彼らが大好きなお菓子を持ってくるなど彼女らは、彼らを大きな子どもとみなしていた<sup>61</sup>。

彼〔ガボンのある黒人〕はパリでは朝から晩まで可愛がられた。若い上品な女性たちが、甘い香りを漂わせながら彼の小屋へと入り、彼の国や妻、子どもたちについて話し、彼に手を差し出し、共感していることを示した<sup>62</sup>。

これらの言説からはアンリクが、博覧会場において本国のフランス人と植民地先住民が交流したという記述を公的な記憶を形成するうえで重視していることが分かる。当然先住民を「大きな子ども」と見做して「世話をする」のは、言い換えればフランス人を大人、植民地先住民をそれよりも未発達な人種としているということである。つまり、見る立場のフランスが主導する交流であり、対等な関係に立つものではない。ただこれらの記述からは、この植民地展示について「空間的に分離された劣等人種を柵の外から見物する」という描き方ではなく、同じ空間を共有することで、「文明化」した（親としての）本国と「未発達な」（子としての）植民地の間に情愛に満ちた親子関係が形成される様子を描こうとしていることが窺える。他にも先住民の帰国日が近づいた際の『広報』には、それまでの4ヶ月間アンヴァリッド広場で非常に流行したこととしてジャワ人と友情のこもった挨拶を交わすこと、アンナン人と握手すること、小さなアラブ人にコインをあげることなどが挙げられている。そしてそれらを経験していなければアンヴァリッド広場に急ぐよう記されており<sup>63</sup>、ここでも先住民との交流が推奨されている。このように、先住民は親しみを持って交流すべき存在としてフランス国民の前に提示されていた。

以上を次のように小括する。先住民やその文化は人々の異国趣味を掻き立て、反語的にフランスの進歩を賛美するものとして恣意的に利用された。しかしその際には大衆文化的な「人間動物園」とこの植民地展示を差別化するような「言い訳」が必要だと考えられており、それと同時に共和派は「未発達な」先住民との交流をフランス国民に対して促した。それはフランス国民に、自国が保護者として植民地を「文明化」する義務を持っているという意識を植え付けるためであったと言えるだろう。そしてそのうえで重要となるのが、先住民もそのようなフランスによる「文明化」を受け入れるようになることであった。次に「先住民にフランスを見せる」という側面を検討していく。

<sup>60</sup> Tran, « L'éphémère dans l'éphémère », pp. 149-150.

<sup>61</sup> Monod, *op. cit.*, p. 141.

<sup>62</sup> *Ibid.*, p. 142.

<sup>63</sup> B.O.E.U., 8 septembre 1889, p. 5.

### 3. 「先住民にフランスを見せる」

#### (1). フランスを見たセネガルの先住民

ここからはアンリクが植民地展示の理念の一つとして述べた「先住民にフランスを見せる」という理念に基づき、フランスを「見る側」としての先住民の描き方に着目する。

先住民はこの万博においてさまざまなものを目にしていた。アンリクによると、彼らは7月14日の国民祝祭日における閲兵式や、サーカス、オペラ座をはじめとする種々の劇場へと連れていかれることがあったという<sup>64</sup>。まずパリを訪問した王族について見ると、地理学者レイ・ルスレ(Louis Rousselet) はディナ・サリフがそうした場に頻繁に顔を出すことで「パリで大成功を収めた」としている<sup>65</sup>。さらにブンドウ (Boundou) の王ウスマン・ガッシ (Ousman Gassi) に関しては、オペラ座の「稽古場 (foyer de la danse)」に連れていかれたとしたうえで「ブンドウの彼の国々へと戻った後に、彼は何度もオペラ座の舞台裏を通ったこの探検の記憶を呼び起こしたに違いない」とアンリクが述べている<sup>66</sup>。アフリカから訪仏した王の一人にオペラ座の舞台裏までも見せたという事実は、それだけで「先住民にフランスを見せる」という明確な意図を示すものである。先住民兵士については、毎週日曜日にパリやその周辺の見物に連れて行かれたという<sup>67</sup>。また、再現村の民間先住民に対しては会期中給料が支払われていたが、無駄遣いを避けるために給料の一部が「小遣い (argent de poche)」として約2週間ごとに渡された。そして会期が過ぎ帰国の前日になると全額が渡され、それで彼らはそれぞれが欲しいものを購入することができた<sup>68</sup>。小遣いが渡されるということは、彼らが会期中常に柵の内側や村の中にいて、当局から与えられたものだけを頼りに過ごしていたわけではなく、パリを見物する機会があったことを示している。先住民は「荷物を増やすことに愉快な情熱を注いで」帰っていったが、そのことは「フランス製品の輸入業者 (importateurs de produits français)」として表現されている<sup>69</sup>。先住民がフランスの産業製品を持ち帰ることで、それが植民地において浸透することが期待されていたのである。

加えて、アンヴァリッド広場のアンナン劇場 (le Théâtre annamite) にも注目したい。ここでのアンナンの先住民によるパフォーマンス公演には万博訪問者だけでなく、パリを訪れていた他植民地の先住民も集まった<sup>70</sup>。つまり、植民地部門で行われるイベントは観客としての本国民のみならず、その場にいる先住民も享受していた。トランはこのことに対して、「植民地フランスの異なる集団の融合もそこで生んでいる」と述べており、本国—植民地間のみならず植民地同士の互いの繋がりが可視化されたことを示唆している<sup>71</sup>。

このように、パリに集まった先住民たちはこの万博の中でフランス本国、ひいては「フランス植

<sup>64</sup> Monod, *op. cit.*, pp. 143-144. なお、前後の文脈からここでの「先住民ら (indigènes)」には村の先住民およびディナ・サリフのように訪仏した王族の双方が含まれると判断できる。

<sup>65</sup> Louis Rousselet, *L'Exposition universelle de 1889*, Paris: Hachette, 1890, p. 147.

<sup>66</sup> Monod, *op. cit.*, p. 144.

<sup>67</sup> B.O.E.U., 19 juin 1889, p. 3.

<sup>68</sup> Monod, *op. cit.*, pp. 145-146. 同箇所には、ガボン人が現在のノルマンディー地方セーヌ・マリティム県に位置するルーアンやボルベックの工場に連れて行かれ、そこで渡されたお金を自国において「交換通貨」として使われる綿布に替えたという記述がある。ここにもフランス製品を植民地に浸透させる狙いを見ることができる。

<sup>69</sup> *Ibid.*, p. 146. 実際に B.O.E.U., 20 octobre 1889, p. 2 には、アンリクがアンナンの先住民 94 人とセネガル人 30 人を集め、彼らが国に持ち帰る記念メダルおよび銃・時計などのさまざまな贈り物を配布したとの記述がある。

<sup>70</sup> Tran, « L'éphémère dans l'éphémère », pp. 156-157.

<sup>71</sup> *Ibid.*, p. 156.

民地帝国」全体の姿をその目に映すこととなったが、この「先住民にフランスを見せる」という考え方は「文明化の使命」と密接に結びつくものであった。例えばセネガル村の先住民が帰国する際『公報』には、3週間前に出発したコンゴ人は「彼らの友人、親、子どもに白人の国の驚異を物語っている」としたうえで、セネガル人に対しても「博覧会の驚異を話し、フランスの偉大さと強さを広めようとしている」と記述している<sup>72</sup>。つまり、植民地先住民に89年パリ万博を目撃させることで、植民地でフランスの文明的進歩が広く受け入れられるようになることが期待されている。また、ディナ・サリフ一行がパリを発つ前には王や首長の子息がアンリクによって中央宮の事務室に集められ、名入りの銃やサーベルなどが贈られたが、その際にノワロは次のように述べた。

あなた方はあちらで、あなた方がその子どもであるところの首長に、強く知的で勤勉な民族を見たと、その民族は美しく強い軍隊を持っていたと、そして彼らは何よりも平和を望んでいたと言うのです。フランス政府はその植民地の先住民を愛しており、彼らに思いやりを保証すると言うのです<sup>73</sup>。

こうした記述から、この植民地展示において「先住民にフランスを見せる」ことの役割はそれが「文明化の使命」と結びついていたからこそ、非常に大きかったとすることができる。

一方で「見せる」という表現は、結局はフランス側を主体としたものである。ではフランスを「見た」側としての先住民については、そのようなフランスの文明をどのように受容したと描かれているのだろうか。例えばディナ・サリフのイラストが表紙を飾った1889年7月7日分『ル・ブチ・パリジャン』の挿絵付き増補版には、彼の妻について次の記述がある。

それゆえ、若いフィリス (Philis)、これはディナ・サリフ夫人の名前だが、その彼女がこれからは私たちの評判の仕立て屋で服を買い、セネガルの海岸から遠く離れたパリの生活の魅力を楽しみ続けたいという旨を夫に突然表明したことを、私は驚くことなしに知ることになる<sup>74</sup>。

要するに、フィリスは「パリから帰りたくない」とディナ・サリフに伝えたことが記述されている。他にも、先住民サンバ・ラオベについて「広場での滞在にこの上なく満足しているようである」とモノは記述している<sup>75</sup>。当然、これらの記述を先住民の生の声として鵜呑みにすることはできないため、植民地側の89年パリ万博の受容についての研究が待たれる。少なくともこれらの記述から分かるのは、博覧会の公的な記憶を形成するにあたって、先住民がフランス社会やその文化を積極的に受け入れる様子を示すことが重視されていたということである。

## (2) 「植民地帝国アイデンティティ」の醸成

ここまで見てきたようにこの植民地展示を「フランスに植民地を見せる」および「先住民にフランスを見せる」という「文明化の使命」を根幹に持つ二つのベクトルで考えてみると、そこでの先

<sup>72</sup> B.O.E.U., 6 octobre 1889, p. 2.

<sup>73</sup> Ibid., 11 août 1889, p. 4.

<sup>74</sup> Le Petit Parisien, supplément littéraire illustré, 7 juillet 1889, p. 2.

<sup>75</sup> Monod, op. cit., p. 176.

住民の描き方には、植民地帝国という枠組みにおけるアイデンティティ共有の促進を読み取ることができる。実際トランは博覧会での消費活動に着目し、先住民が万博でフランスのものを消費してその経済秩序への統合される一方で、本国民は植民地の物品に触れるという形で文化の相互浸透があったことを論じた<sup>76</sup>。その際には、植民地部門の向かいにある社会経済展 (*l'exposition d'Économie sociale*) の大衆レストランに先住民兵士が集まったことを取り上げた。そこでの民族の混在が、共和主義の光を囲むフランス植民地の様々な民族の統合を象徴するようになったと指摘し、食事が植民地間の共同体意識を作り出す手段として見做されていたと述べている<sup>77</sup>。

次に当時の記述を見てみよう。『公報』には先住民のフランス語能力に関する記述が度々見られ、セネガル村の先住民の幾人かはフランス語を正しく話すということや<sup>78</sup>、セネガル兵の多くは全ての動詞を不定詞で使い、最も簡単な形で文章を表現するということが示されている<sup>79</sup>。先住民のフランス語能力に対する関心の高さは、それだけフランス語を共有する一つの共同体の構成員としての性格が意識されていたことを示すだろう。ここにはちょうどこの時期に生まれたフランス語圏としての「フランコフォニー (*francophonie*)」という概念を想起することもできる。また民衆に広く愛読された『ル・プチ・パリジャン』紙には、セネガルとアンナンを中心に先住民兵士を取り上げた記事の中で、「彼らは私たちのために苦悩し、彼らは私たちの旗のために勇敢に戦っている。彼らも栄誉を受けるのは当然であった。」という記述や、「彼らは弾丸の音を聞き、敵に攻撃を仕掛けて、真のフランス人になった」という記述が見られる<sup>80</sup>。これらの記述からは、先住民を本国民とアイデンティティを共有し得る存在として描いていることが読み取れる。

また『公報』には次のような記述がある。セネガルの先住民が帰国する際、当局は彼らが出発前にパリ周辺を訪問できるよう資金を用意した。しかし、フランス領セネガルの創設者とも言えるルイ・フェデルブ (*Louis Faidherbe*) 将軍が死去したことを知ると、先住民らは「自発的に」その資金で花輪を購入した。それを聞いたサディ・カルノ (*Sadi Carnot*) 大統領はとても感動し、彼らにフランスを代表して感謝を表し、良い旅路を祈ったという<sup>81</sup>。「自発的に」という部分の客観的事実性を問うことはここではしないが、先住民が「自発的に」フランスに親しみを持つ様子を描こうとしていることはこれまでに述べてきたことと通じている。これらの記述には、同化政策の理念を想起させるように、本国民と先住民が「植民地帝国アイデンティティ」を共有していく様子が描かれているのである。

そしてはじめに述べた通り、万博の意義は本国民と先住民が実際にその場で接触し、交流することにある。その点を考えると、こうしたアイデンティティの同一志向性は万博という祝祭空間において本国民にもある程度共有されていたとみることができる。例えば7月22日にモンマルトルで特別興行としてライオンやシロクマなどを集めたショーが行われ、ディナ・サリフおよびその家族と共に「アンヴァリッド広場の全ての」先住民が出席した<sup>82</sup>。そして終演後、ディナ・サリフを見ようと会場の外に集まった「大群衆」が<sup>83</sup>、彼らに「信じられないほどの喝采」を送り、先

<sup>76</sup> Tran, « L'éphémère dans l'éphémère », pp. 160-163.

<sup>77</sup> *Ibid.*, pp. 162-163; Tran, "How 'natives' ate at colonial exhibitions in 1889, 1900 and 1931", pp. 165-166.

<sup>78</sup> *B.O.E.U.*, 17 mai 1889, p. 3.

<sup>79</sup> *Ibid.*, 20 mai 1889, p. 3.

<sup>80</sup> どちらの記述も *Le Petit Parisien*, 12 mai 1889, p. 1.

<sup>81</sup> *B.O.E.U.*, 6 octobre, 1889, p. 3.

<sup>82</sup> *Ibid.*, 25 juillet 1889, pp. 1-2.

<sup>83</sup> *Le Petit Journal*, 24 juillet 1889, p. 3.

住民らもそれに応えたという<sup>84</sup>。さらに 8 月 13 日の『ル・プチ・パリジャン』紙には、その前日にディナ・サリフがパリから帰る際の様子が記述されている。そこでは、彼らの乗った列車が動き出すと集まった群衆が身を乗り出して喝采を送ったことや、ディナ・サリフやその同伴者らが「この好意の印」に応える形で、出発ホームに集まった人々が見えなくなるまで帽子を振り、キスを送ったことが記されている<sup>85</sup>。先住民と本国民の間で醸成されたこの祝祭的な雰囲気からは、両者の一体性を指摘することができる。ここで、植民地文化がフランスの先進的な文明と対比され、人々の異国趣味を掻き立てる異世界として恣意的に表象されたことを想起すると次のように結論づけることができる。89 年パリ万博において共和派が演出し、フランス国民が目撃した先住民像は、野蛮で異質な文化を持つ一方で、共和主義の精神に基づいた同じ共同体の構成員として同一のアイデンティティを共有し得るという、両義的なものであったのである。

## 結論

本稿では、「セネガル村」を中心にセネガルからパリを訪れた先住民を事例として取り上げ、植民地展示の二つのベクトルから、89 年万博における先住民像や帝国イメージの形成に関する再検討を行った。本稿の主な論点は以下のようにまとめられよう。

第三共和政を率いる共和派が主導した 1889 年パリ万国博覧会は、フランス革命を起点とする 100 年の間にフランスが達成した「進歩」を讃えるものであった。その中で、フランスの進歩を反語的に賛美し、本国民の異国趣味を掻き立てるために恣意的に導入されたのが植民地村落の再現という新しい展示形態であった。共和派は、大衆文化的な「人間動物園」との差別化を図りつつも、この植民地展示を通して本国内外における「文明化の使命」の普及と植民地政策の正当化を目指した。まず「フランスに植民地を見せる」中で、本国民と先住民との間の親密な交流を促進・演出し、「文明化」した本国と「未発展」な植民地の間に情愛に満ちた親子関係が形成される様子を描こうとした。その一方、「先住民にフランスを見せる」ことで、植民地において積極的にフランス支配が受け入れられることを期待した。そして、そうした様子が公的出版物などを通して国民に示されており、この万博の先住民は、野蛮で異質な文化を持つ一方で、「植民地帝国アイデンティティ」をフランス国民と共有し得る、両義的な存在として描かれていた。

以上が、この万博の植民地展示をめぐる本稿の見解である。さて、今年 2024 年の 10 月にはフランスでフランコフォニー国際機関 (OIF) のサミットが開催される。フランス語を共有する人々の連帯がアピールされていることから分かるように、本稿で論じたアイデンティティの共有を目指すフランスの同化主義的思想やその歴史は現代にも影を残している。一方で、ニューカレドニア独立問題や移民系との社会的分断の進展など、植民地の歴史に端を発する政治的・社会的問題が深化しつつある現在、ますます第三共和政期の帝国形成に関する研究は重要なものになっていくだろう。それにあたって、この万博が与えてくれる示唆の大きさを示していれば幸いである。

筆者自身の今後の課題としては、村に住まう先住民がパリでどのように過ごしていたか、出身植民地ごとにその差異はあったのかなど、本稿で議論し尽くすことのできなかった彼らの姿について、限られた史料の中からさらに検討していきたい。

<sup>84</sup> B.O.E.U., 25 juillet 1889, p. 2.

<sup>85</sup> Le Petit Journal, 13 août 1889, p. 1.